ちりゆく花②

(1) 正江の父は、「ふーん、するとお前は悪い役で、あの渡守の娘のヨウ子に良い役をやらせるというのか。けしからん先生だ、すぐに校長にかけ合ってくる」

(2) 「わしはPTAの会長だから、その権利がある」と、正江の父、古川大吉は、校長先生の家へとやって来ました。そして校長先生に、

(3) 「校長さん、正江からいろいろと聞いたが、正江に良い役をやらせないのならあの学芸会で劇をやるのをやめて下さい」校長先生は困って、ただ「ハァ…ハァ…」と聞いていました。

(4) 翌日、校長先生は田中先生を呼んで、「田中先生、わしは困りましたよ。これこれでな…。何しろ古川さんはたくさん寄付をしてくれるんでのう」と言いました。しかし田中先生は、

(5) 「私、お断り申します。生徒たちに、劇をやることも、役割も発表してあるので、今さら変えるとかえってみんなの気持ちを変にさせます」「うーむ」と、校長先生も考えこんでしまいました。

(6) 「何とかうまい工夫がないかなァ。何しろあの金持ちでボスの古川をおこらせたら大変だからなァ。そうだ、良い考えが浮かんだ」間もなく、校長は

(7) ヨウ子の父、渡守の清吉のところへやってきました。「あ…校長先生、何か用ですか」「うーむ、まァ、その、折り入って頼みがあるんだ」

(8) 「実はこれこれこういったわけで、何とか娘さんに話して、自分から役をやめるように言って下さらんか」「へえなるほど、そうですか。古川さんはえらいんだから、仕方がありませんや」と言ったものの、ヨウ子のことを考えるとあまり良い気持ちではなかった。

(9) 「しかし、たかが学芸会の役くらいで嫌な思いをさせるなァ。とにかく、ヨウ子が何と言うか話してみよう」渡舟を終えて家に帰ってきた清吉は、

(10) 「ヨウ子、わしは頼みがあるんだよ」「なァにお父さん」「うーむ、あの学芸会へ出ないでおくれ」「エッ、なんで」「何でってワケなんかないさ。それはね…」父の清吉はヨウ子に本当のことが言えず困っていたが、さて…